昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十九年四月十五日発行毎月一回・十五日発行）
（通第一八〇号）

慈光

第十六巻　第四号

目次

「教行信証」欲生釈……近角常観……（1）
求道硯滴（四）……福島政雄……（8）
随感随想……柳瀬留治……（12）
堂の鈴（十五）……佐藤強三郎……（15）
大安慰……花田正夫……（20）

『教行信証』欲生釈（三）

二河白道の譬喩

近角常観

前席に於いては、欲生の如来廻向の趣きを話したのであります。既に再々申すが如く、阿弥陀仏の本願に、至心信楽欲生と、この三信が誓われてある。その至心は、即ちまことであり、信楽は信じ楽うこと、欲生は浄土に生れんと願い求むることである。

即ち至心信楽欲生の三信は、我々がまことを以て、仏を信楽し、浄土に生れんと願い求むる事であります。さりながらその三信が、我々自分の方よりまことを以て仏を信楽し、極楽に生れんならんと、我々の方より力んで出来るかと言うに出来ぬ。其処でこれを何う頂くかというに、私の方よりは、まことになれぬが、その者に仏の方より、まことを以つて向うて下さるのである。

私の方には、まことと言うては一分一厘も無く、又仏を信ずる信楽の心も無ければ、浄土に参りたいという欲生の思いも無い。けれども、その者を仏よりしてまことになし下され、そのまこと無き者に飽くまでまことにして下さる、仏のまことによりて、初めてまことならざる私の心に、有難いまことの思いがおこるのである。

してその仏のまことはというに、飽くまで私を信じ、遣る瀬なく此の者を哀れみて下さる信楽の慈悲である。故に至心のまことは、信楽の慈悲である、となるのである。こは私の方には仏を有難いと仰ぐ信楽の思いなどは毛頭ないに、其の者をば仏より飽くまで信じ下され、私の方よりは仏に向わぬに、仏より何処までも其者を愛して下さる仏の信楽であります。

又欲生も、もとより私の方から極楽に生れ度いなどの思いは更に無い。けれども其の仏に背き遁げ廻つている私を、飽くまで仏の方より斯く広大のまことを以て、信じ哀れみ見捨てず、何処までも我が浄土に生れんと欲えと、遣る瀬なく向う様より呼びかけて下さる呼び声である。故に欲生は仏の方より私へ、弥々あなたの大悲を下さる処の如来廻向であると、これが至心・信楽・欲生の三信である。

先日来この事をお話したのであります。殊に前席来話す

処の最後の欲生は、弥々私の手へお慈悲を手渡し仕て下さる処の最も肝腎の処であります。そこで再々繰り返すなれども、以上を喩えて言うと、一杯の茶碗の水がありて、それが南無阿弥陀仏の水である。而して其の水は綺麗な透きとおつた水である如く、其の南無阿弥陀仏は、飽くまで私が可哀相でたえられぬとある、清浄真実の至心の御まことである。

而して其の綺麗な透き通つた水は、即ちなみ〳〵と湛え溢るる水である如く、其の至心の御まことは、何処までもその哀れなる者が捨てられぬとの信楽のお慈悲の心である。しかして其の溢るる水は、即ち此方に飲まそうが為の水である如く、その仏の信楽のお慈悲は、このまことなき私に、それをそのまゝ廻向して、来たれ〳〵と呼びかけて下さる欲生の呼び声であるとなるのである。即ち南無阿弥陀仏の六字は、何かと言うに、仏が私を飽くまで哀れみ思召すあなたの御まことの外に無い。してその御まことはどうしても其の奴が捨てられぬという信楽のお慈悲。その慈悲は大悲の思い遣る瀬なく、あなたの方より呼びかけて下さる欲生の御親切である、となるのであります。

○

而して其の呼び声によりて、私の方に廻向して下さるものに二つある。即ち往相と還相の二廻向である。往相の廻向というは、夫れ程広大のお恵みで我々を遣る瀬なく思召し下さる、その大悲のお心を頂くと、此の世の生命おわり次第、我々を極楽浄土に往生させて下さる。これが往相の御廻向である。さりながら其の広大の思召しを頂いた上からは、唯極楽に参らせて下さるばかりでは無い。真に極楽に参らせて貰い、仏と成らせて貰うと弥陀と同体、一体一味、親様と同じ心にならせて頂くのである。

さてその真実、目の醒めたる清らかなる境界に往き、振り反り三界を見ると、世々生々の父母兄弟が、なお三界に迷うている有様が、じつとして眺めて居られぬ。故に又このたびは、極楽より再び姿を現わし、一切有縁の人を、手引きし、此の人達にこの広大なお慈悲を知らすために、再びこの世に還つて来るとなるのである。之が還相の御廻向である。

この仂きをも信の一念に仏の方より下さるのであります。で以上を言いかえると、南無阿弥陀仏の広大の御恵みより、まことに出来ぬ私のため、飽くまでまことにして下され、私が信じ喜ぶ心が無いのに、仏の方よりは何処までも此者を見捨てず愛して下され、私がお慈悲に振り向かぬのを、仏の方より先手で呼びかけ、我が浄土に生れんと欲えと遣る瀬なく呼びかけて下さる。その広大のお恵みにより、我々が心に其の遣る瀬なきお慈悲の知れた一念には、

それ程までの広大の思召しが分るもの故、心に「有難う」と浄土に参らせて貰おうと欲する欲生の思いが起る。

故に其の上からは、此の世に在る限りは、このお慈悲一つで人生を通らせて貰い、生命畢れば、設い命終の時、勇ましく終らぬも、必ず極楽に参らせて頂き、さとりの境界を開かせて貰う。

其の悟りの境界は、即ち大悲の親様が一如法界の都より法蔵菩薩と名告りをあげ、我々を助けんがため此の土に顕われ下されたる、その阿弥陀仏の境界に到らせて貰うの故、此度は我々にも、その一如法界の境界より、再び人生に済度に出て来る力を得させて貰うとなるのである。これが還相廻向のお恵みなのである。

で我々は此の世に於いて、不思議にお慈悲の有難きを頂かせて貰い、その頂かせて貰いたる道筋を考えるに、人生種々の人々により、種々なる悲喜の御縁を受け、ひと通りならぬお手引を蒙りたるを感ずるのである。かくこれ等の人々が、或は父子兄弟となり、夫婦朋友となり、自分がお慈悲に導かれる種々の御縁を作りて下されたるは、これ皆還相の廻向の御恵みである事を、信仰の上から頂かれる次第であります。

○

さて斯く遣る瀬なきお慈悲を、今席は弥々頂く処を、善導大師の二河白道の譬喩により、お知らせ下されたのであります。先ず御文を読ませて貰うと、

『光明寺の和尚の云く。又廻向発願して生ずる者は、必ず決定して真実心の中に廻向したまえるをもちいて、得生の想をなせ。此の心深く信ずること金剛の如くなるに由て、一切の異見・異学・別解・別行の人等のために、動乱破懐せられず。唯是れ決定して一心に捉りて正直にすすんで、かの人の語を聞くことを得ざれ。即ち進退の心ありて、怯弱を生じ、回顧すれば道に落ち、即ち往生の大益を失する也と。已上』

光明寺の和尚とは、言うまでもなく善導大師であります

『廻向発願して生ずる者は、必ず決定して真実心中に廻向したまえるを須いて、得生の想を作せ』

「廻向発願して」は、廻向は前席で詳しく申すが如く、我々が自分の思いを向うに廻らし向けるが本来の意味である。つまり我々が此方より自分の心を向けて、欲求する心であります。

処が親鸞聖人は、我々が此方より願を発し、此方より思いを向けて向うに求めるとなると、何うしてもそれでは我々は到れない。故にそれをば逆まにして、仏より哀れと衆生の方に願を発し、廻向し与えて下さる事であると、お

示し下されたのであります。

で「廻向発願して生ずる者は、必ず決定して真実心中に廻向したまえるを須いて、得生の想を作せ」……仏が真実心中に於いて、身口意の三業、身に修する所も、口、意に修する所も、これも衆生の為、あれも衆生のためであると、廻向して下さる。この廻向して下さる広大なる仏の願を須いて、である。「須いて」とは、医師の薬を、こは自分の病気を癒して下さる薬と、有難く服用するが須いるである。即ち親様が、斯く衆生を助けてやろうと、向う様より廻向発願して与えて下さる。その広大のお慈悲を有難く用いるのである。して向う様から斯くまでにして私に与えて下さる広大な思召しを須いて、往生決定の想いを作せ、とであります。

『此の心深く信ずること、金剛の若くなるに由りて、一切の異見・異学・別解・別行の人等のために、動乱破懐せられず。』

自分で広大のお慈悲により、往生決定と思うて居るだけの信心なら駄目であるが、此の心は今仏が遣る瀬無き御廻向の真実を頂いて、仏のお慈悲で決定した往生一定の信心なれば、どのような事があつても、お慈悲の方が確か故、壊れるという事が無い。その深く信ずること、実に金剛の如くなるによりて「一切の異見・異学・別解・別行の人等のために動乱破壊せられず」である。

異見とは異なる考を抱いて居る人、異学は学問の立場の違つた人。其の他別解・別行の、別の了解や、別の行法を持つて居る人、それ等の人達が来つて、設え如何ように言おうとも、仏のお慈悲で頂いた信心なれば、此の信心が動かされ、乱され、破れ、壊れるということは無い。これは一たび遣る瀬なき弥陀廻向のお慈悲に疑い晴れ、心よりあやまり果てて頂いた信心なれば、設い何人より何と言われ、又人生の如何なる出来事に遇おうと、決して動かさるる事無いのであります。

これは御同様、此の人生が暗くなればなる程、南無阿弥陀仏一つが、弥々明かに輝いて下さる事は、今度中村氏が御往生の際、死が近づくと共に、弥々力強く喜ばるるにて、明かに見せて頂きた事であります。殊に氏が最後まで病床に訪ねて、お慈悲のことを話した私としては、又氏が生前、其の席に列なるを最も楽しみとせられた此の会合の皆さんとしては、氏が苦しき病苦間に、遣る瀬なき念仏のお慈悲一つで、安んじて往生を遂げられた事は、疑おうとしても疑えぬ事である。即ち広大のお慈悲一つで、氏が極楽浄土に参られたことであります。

これが唯、我々が、自分の考えでそう思うてるだけなら、単なる想像に過ぎないのである。さりながら事実明か

に、同一念仏を喜ばせて貰おて居る我々としては、設え氏の身は亡ぶも、氏が喜ばれた信心、氏が喜ばれた広大なるお力一つは永久に生き長らえて、仏の浄土に往生し、安養界より今この席を照覧して居て下さる事は、疑おうとしても疑えぬのである。すればこの心深く信ずること、実に金剛の如くである。この遣る瀬なきお力を共に知らされ、頂いて居る御同様としては、設い異学異見・別解別行の人が何と言おうと、この明かな事柄を動かすことは出来ぬのであります。

○

次は

『唯是れ決定して一心に捉つて、正直に進んで彼の人の語を聞くことを得ざれ。即ち進退の心有つて、心に怯弱を生じ、回顧すれば、道に落ちて、即ち往生の大益を失するなり』

「唯是れ決定して」は、決定は今の向う様からの仰せに、遂に此方の頭が下がりて、頂いた一念が、決定である。処が多くの人は　向う様のお慈悲の方は聞こうとせず、自分の方から決定することばかりに力をいれるから、決定されぬのであります。

これは例を以て言えば、前席申した大草師が病中喜んで下された時、私が「あなたと私は今生夢の中の交わりとして斯く長らく親しくさして頂いたが、何うかあなたもお慈悲一つを頂いて下され。あなたが頂いて下さると私も其のお慈悲一つを喜ばせて貰うて居る事であれば、其の一念にあなたも私も『唯信鈔』にお示し下さる

『今生夢の中の契をしるべとして、来世のさとりのまえの縁を結ばんとなり。我おくれなば人に導かれ、我先立たば人を導かん。生々に善友となりて仏道を修せしめ、世々に知識となりてともに迷執をたゝん』

である。故にどうかあなたも頂いて下され」という言下に、「あゝ有難い。君能く言うて呉れた。今まで何時決定の時があるか〳〵と思うたに、あゝ分つた」と言われた一念が一心なのであります。

「正直に進んで彼の人の語を聞くことを得ざれ云々」……「斯の遣る瀬なき仰せを頂いた上からは、正直に進んで、他の者の彼れ是れ言うのに耳傾けてはならぬ。其の時若し進退の心あつて「こうか、あゝか」という思いを起し、怯弱の憶病な考を生じてあたりを顧慮すると、道を踏みはずして往生の大益を失するぞ」とであります。

併しながら茲に言うべきは、茲で「それだから人の言に迷わされてはならぬ」となると、忽ち自力に陥入るのである。真実の信仰の上からは、然うじや無い。設い人が何と

言おうと、迷おうと思うても迷う事出来ぬ処が、真実頂いた味わいである。故に親鸞聖人は、『歎異鈔』の二章に於いて、親鸞は設い人が法然聖人の仰せをうそである、欺かれて居るのであると言うとも、うそでも構わぬ、欺かれて居るのでもよい。……

『たとい法然聖人にすかされまいらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。』

とお示し下されたのであります。

で今これを中村氏の事に引き当てゝ、御来聴を幸い、遺族の方のために言うならば、設い人が如来の教法をうそである、迷信であると言おうとも、既に自家の主人が、自分等のために、その教えを信じ、其の法を遺して浄土に参られたのである上は、設い人が虚言をいおうと、其の法を信じて、設い欺されてその為に地獄におちても後悔せぬのである。何故ならばその次の『歎異鈔』のお言葉には、

『その故は、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏をもうして地獄にもおちてそうらわばこそ、すかされたてまつりてという後悔もそうらわめ、いずれの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。』

設い虚言なら虚言でもよい。何故ならば、外の教法によつたら間違いなく往生出来た身が、念仏を喜んだために地獄にもおちたのなら、すかされた、欺されたという後悔もあるであろうが、自分は最早、何れの行も及ばぬ、何れの道も尽き果てた、地獄へ行くより行き場の無い身の上である。然るに其の者を今哀れみて捨てぬとの広大の御聞かせに預りたのであれば、この、右にも左にも行けぬ者を、それが可哀想で捨てられぬと言つて下さるは、阿弥陀仏、御一仏である。故にこの何れの道も絶え果てた者を、それをお見捨て下さらぬお慈悲一つが有難い、とより言いようが無いのである。

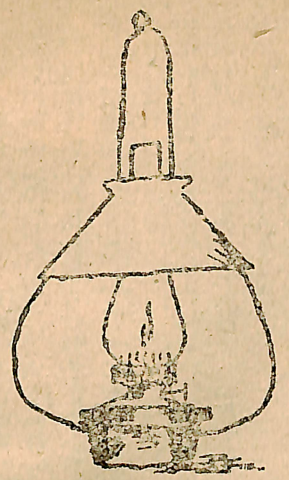
処がここがしつかり頂けてないと「こんな事でよいのか知らん。これで堕ちんのか知らん」で、何時まで経ちても安心の時はないのである。

然うではなく、真実お見捨て無きお慈悲が頂けた上からは、設いだまされて地獄に堕ちたりとも、その如き仕て見よう無き者を見捨てぬとある遣る瀬なき仰せ一つの外無いのである。設いそのためにだまされて地獄に堕ちたりとも、更に後悔すべからず候、なのであります。

なおここの処は取り違え易き処故、もう一度申して置きますに、全体ここの御文はのちに話す二河白道の譬喩より出て来るお示しなのである。而して其の二河の譬えは、何をお示し下されたかというに、信心の上からは、設え人が何と言おうと、遣る瀬なき呼び声一つを信じて、動かぬ

信、堅牢の味わいをお知らせ下されたのである。処がそれを聞きぞこなつて「それだから俺は人に迷わされてはならぬ」と力まなくてはならぬのは、まだ本当に頃けたものでない。真実遣る瀬なき呼声に打ち明かされた上からは、設い「虚言である」、「偽りじや」と人から言われようとも、虚言でも偽りでも、此の仰せを頂く外ないのである。何故ならば、なお外に助かる道があるなら、外にしようもあろうなれども、今はいずれの行も及ばざる地獄一定の身の上である。然るにその者を見捨てざる広大の慈悲であるぞと、遣る瀬なき御親切に喰いつかれて見れば、最早これを頂かざらんとするも、頂かざるを得ぬ、となるのであります。

続く



おりにふれて

北岡行男

日日信に離れ暮らして日短か
埋火を掻けば憶念蘇り
鉄塊の温められし炭火かな
冬日下遠き縁を慶びて
冬籠り悪性さらに止むべしや
この日頃本願ぼこり冬籠る
くさぐさの癖持つ吾なり炉にすがる
かざりなき息吹仄かに雪籠り
小春日はかくの如きの吾を照らす
わぎもはも御同行や親鸞忌
一人居て二人と思ひ炉辺に寄る
元旦や有縁の人に恵まれて
この庵に住みつき妻と屠蘇交す
わがさだめさもあらばあれ屠蘇を受く
もろ〳〵の障り解ぐれて日脚伸ぶ

求道硯滴（四）

福島政雄

竹風翁のこと

竹風翁と言つても御存知でない方もありましよう。登張信一郎氏であります。私が三十歳の頃、仙台の二高ではじめて相識るようになつた方であります。その頃の氏は五十歳に近かつたように記憶しています。

生れは広島県の江田島に続いているところ（倉橋島？）でありまして、いわゆる安芸門徒の空気の中に育つた人であります。併し東京大学でドイツ文学を専攻し、卒業後は「帝国文学」の編輯をするようになり、此の頃から酒を大いに飲んで豪放を気取るようになつたと、御本人は自分で私に話されたことがあります。その後盛んにニイチエ研究をせられた為に東京高師の教授であつたのが、排斥せられて仙台二高に転ぜられたと聞いて居ります。

仙台二高では自由に特色を発揮して居られたようであります。朝から酒を飲んで酒気紡々として教室に出てニイチエのツァラツストラを二三頁自分で訳してきかせて、それで授業は終りという有様であつたようであります。東京では義太夫の稽古もせられたそうでありまして、そんな気分で二高生にドイツ語を教えられたものでありますから、真面目一点張りの教授などはひどく之を嫌つていた人もありました。

併しこの竹風子は決して豪放そのものという人ではありませんでした。谷本富先生から教わつたという関係で、谷本先生の前に出られる時は非常な謹直な態度であつたと聞いています。谷本先生は有名な教育学者で浄土真宗の信仰の人でありました。

豪放で大酒飲みと見られていた竹風子にも、遂に廻心の時が来ました。其の頃私どもは仙台求道会というものを作つて、一学期に一度づつ近角常観先生を東京からお招きして信仰上のお話を三晩きいて居りました。私はこの求道会のお蔭を蒙つたことは大なるものがありました。私が長女の和子を亡くしました同じ夏に常観先生もお子様を亡くされたのでありまして、その秋の求道会では「信仰の徹底と人生と彼岸との交渉」というお話をして下されまして、私は何とも云えないお慰めをいただき、数え年四つで亡くな

つた和子は仏のお浄土から暫く私共のところに来ていた仏の御使と感ずるようになりました。和子がお浄土へ帰つて行く後姿を見送つたと感ずるようになりました。有り難いことでありました。

恰度此の時、竹風子は廻心という大転換をせられたのであります。それは鮮かな転換でありまして、非常に喜んで居られたのであります。ニイチエは四十八才にして心が狂うようになつたが、自分は四十八才にして親鸞聖人の信仰に転じたと言つて居られました。

これから後の竹風子について私が非常に感じましたことは、その宗教的情操の豊かさであります。何とも云えない信仰の上の情操を私は竹風子の上に感ずるようになりました。そしてそれは幼少の時に安芸門徒の空気の中で育てられたその宗教的情操が信仰の上で生きて来たのであると感じました。それは非常に尊いことであると感じたのであります。

それから後の竹風子にはニイチエが信仰の上で生きて来ました。ニイチエのツアラツストラを信仰の上から味わわれるようになりました。ニイチエが云う超人というのは仏陀であると解釈せられました。ツアラツストラの最初の部を『如是経序品』という題で訳せられました。

「光炎菩薩（ツアラツストラ）御齢三十にして、その故郷を去り、故郷の湖辺を去りて、遠く山に入りたまえり。山に住して禅定に入り、孤独寂寞を楽しみたもうこと、茲に十年なるに、未だ曾て倦みたまうことなかりき。十年の後心機遂に一転、某の朝、曙光を仰いで起ち、昇る大日輪を仰いで、語つてのたまわく。」

これがその開巻第一の訳でありますが、これは竹風子御自身の心境を語るにツアラツストラを借りられたものと見るべきでありましよう。そして竹風子は釈迦牟尼世尊の成道の時の有様を、仏本行経から引用していられるのであります。そしてツアラツストラが山を下つて「人の許に趣かんとす」というのを解して、光炎菩薩の還相廻向と言つて居られます。

ニイチエの超人ということについては、色々の解釈があるでありましよう。竹風子はこれを解釈するというよりも自分の新しい心境を言いあらわすのに、超人とは仏陀であるという。それは端的の感じであつて、新解釈を下したというつもりではない、ニイチエの語を借りて之を転じて自分の新たな心境を述べられたものと思われるのであります。

私が仙台二高から広島高師に転任しました時は、竹風登張氏と阿刀田令造氏とが特に宴を設けて送別せられました

が、阿刀田氏は以前から常観先生の御教化を受けて居られた人であり、私を広島高師へ送るのは、仏教の精神をもつて将来の教育者を育てて貰いたいという心からであると言われました。竹風子はお酒の勢で「槍さび」を歌つて踊つて私を元気づけて送つて下されました。

その後二十一年余り私は広島で勉強したのでありますが、五十三才の春、満州の建国大学に転ずることとなり、そして不思議にも竹風登張氏と再び同じところで勤務することになりました。その時の登張氏は七十才を越えられる頃でありまして、もはや竹風翁と申すべき齢になつて居られました。建国大学ではよほど鍛錬的な教育が行われたのでありますから、学生達は何等かの方面で心の和ぎ求めて居りました。その学生の要望に答えられたのが竹風翁でありました。学生一同の晩餐会というようなときに竹風翁は軽妙な話をして皆をよろこばせて居られました。登張先生のお話を時折聞かなければ建国大学の学生生活にはとても堪えられないと或る学生は言つて居りました。すなわち翁は正面から仏法の信仰を説くようなことをせずに、青年学生の緊張した心を和げることをせられたのでありました。

これに比べますれば、私はただ一方向きに仏教を説いていました。学生の中にお念仏の縁のあるのが四人ばかりあつて、大無量寿経の話をききたいと言つたものでありますから、それに応じて毎週講話をして一年半ばかりも続けたのでありました。

教授会の時など大てい私は沈黙して、稀にものを言うことがあつても低い声で言つたものでありますから、竹風翁から、福島君は低い声でものを言うから皆にきこえないとたしなめられたこともあります。それに憤激したというわけでもありませんが、竹風翁の古稀のお祝の集りの時によほどの大声で何かを歌つたことがあります。そのあとで竹風翁は、福島君という人間は不思議なものだ、教授会ではあんな低い声でものを言うのに、此間はえらい大きな声を出したと云われたものでありました。

此のようにして私は更に竹風翁に親しんで行つたのでありますが、翁の信仰は心の奥にひそんで、それが外には愉快に人を和らげる姿となつて現れるということを感じました。或る時には私に「灯火消えて明月の宴となりし時」というような言葉を書いて下されたこともありました、灯火は煩悩の燭火であり、明月は仏の心光であるという心持でありましよう。

「如是経序品」の外に竹風翁はツアラツストラを忠実に訳した本をも出されました。私はその本を一冊持つて行つて、扉に何か書いていただきたいと願いました時に、駱駝、獅子、小児と書いて、悲しい哉余は七十になつても駱

駝の境を免れないと書いて下されました。これは御存じの通りニイチエが人間の魂の進みに三段あるといつて、最初は駱駝のように営々として生活の重荷を背負おて行くが、心境が一転して開けて来れば、獅子のように強くして自由な境に入ると言つて居ります。竹風翁が七十才にしてなお駱駝の境地を免れないと書かれたのは非常に尊いことと私は感じたのであります。「浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし」のお心に通う心境であると感じますのであります。

無明長夜の灯炬なり
智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり
罪障重しとなげかざれ

と私に書いて下されたこともありました。

併し竹風翁の晩年は非常にお気の毒でありました。終戦の直後に御長男は自殺せられました。ロシヤの婦人と結婚して居られたということであります。それから御郷里に帰つて居られましたが、辛酸を共にせられた令夫人が翁に先立つて亡くなられました。その後東京に司法官夫人として縁づいて居られた令嬢のところに居られましたが、令娘も父上に先立つて亡くなられました。全く何とも申しようのない悲痛な御事でありました。そして結局は御二男のところに行かれて、八十余才で世を去られました。私は一両度お目にかかりましたが、耳が遠くなつて居られて、あまりお話も出来ませんでした。

これが竹風翁についての私の想い出の大略であります。宗教的情操が豊かであつて、しかも信仰をあまり表面に現さず、ニイチエに深入りせられた翁が、結局ニイチエに親鸞聖人と融け合うものを味わい、ニイチエはニイチエであり親鸞は親鸞でありながら、翁の心の中には両者が融け合うという境地が開け、豁達無碍（かつたつむげ）というような生活に入られたところに、私は尊いものを感じ、私のように口に仏教を説きながら、一向に心境の開けない者は、慚愧するばかりであると思いますのであります。

（昭和三十九年二月二十五日稿）

『飯倉だより』　島崎藤村

老年

老年は私が達したいと思う理想境だ。今さら私は若くなりたいなぞと望まない。どうかして、ほんとうに年をとりたいものだと思う。

十人の九人までは、年をとらないで萎（しお）れてしまう。その中の一人だけが僅かに真の老年に達し得るかと思う。

随感随想

柳瀬留治

一、「おゆるしを乞う」

私はふと春秋社の「春秋」で〃野いちご〃の一文を読んだ。北海道大学の藤野教授の書かれたもので、スエーデン映画の〃野いちご〃の一コマです。

主役の老名医が、業界最高の名誉賞を受けるので、授与式に行く車中、まどろんで夢を見たのです。主役の老医が医師試験を受ける場面で、若い人達に雑（まじ）つての受験です。年下の試験官の前に呼び出され

「医師のつとめの第一は何か」

と問われ、そんなことはきまつているじやないかと言わんばかりに、

「患者をなおすことだ」と答えると、

「それは違う、あなたは不合格です」

と宣告される。けげんそうな顔をする老医師に対し、若い試験官は教えて、

「医師としての第一のつとめは、患者におゆるしを乞うことです」と言つたとの話です。

その話と関連し、最近の新聞の報じた東大医学部の沖中教授の停年の記念講義で

「私の誤診率は十四・二％であつた」

との大胆な告白についてです。天下の名医で、しかも完備した大学病院でさえこの数字であるということは、

「おゆるしを乞う」

重要な意味がある。人間が同じ人間を診たてる。そこに本質的な問題があるのだ。これは医師だけの問題でなく、人を裁く者、人を教える者、すべてに重要な根本的な態度だと結ばれてある一文でした。

それで私は若い頃陸軍士官学校に勤めていた時、成程と思つて見ていたことがある。それは故秩父ノ宮がまだ士官学校の生徒でした。教官が秩父ノ宮のいられる中隊を教練し、或は号令をかける時、或は講義する前に、殿下に向つて敬礼したあと、号令なり講義なりをするのです。これは儀礼としてであろう。だがそれには「これから一生徒として扱いますからお許し下さい」の意をもつものと思うのです。そした儀礼は剣道の仕合の始めや後にも、柔道、角

力、野球にもあることですが、これは形式的儀礼だけでも微笑ましいが、心からの謙虚さからであつて欲しいものだと思うんです。

こうした謙虚な心からの礼が失せて、氏族相争つた推古時代に、彼の厩戸皇子が摂政として憲法十七条を作られて和を喩し礼を極説されたことです。

今ここで思うのは、その第十条です。

「人皆心あり、心おのおの執あり。彼れ是とすれば、即ち我れ非となし、我れ是とすれば、即ち彼れ非となす。我れ必ずしも聖にあらず、彼れ必ずしも愚にあらず。共に是れ凡夫のみ。……」

のお言葉です。

この「心」というのは、意見といつても、見方といつても、主義主張といつてもよいものでしよう。

「執」とは、おのれの意見、見方、考え、それを守り、それを基本としてゆくことだと取つてよいでしよう。それを各々が貫かんとして、おのれが「是」だ、間違つていない、人が「非」だとするが、そうするおのれも「聖」ではなく、相手の人にしても「愚」とすべきではない。

「共に是れ凡夫のみ」、「凡夫」というのは、人間だというので、人間は人間に対してすることに対して「お許しを乞う」てやるべきだ、の底意があることと思われるのです。そして「かえつて我があやまちを恐れよ」と結んでいられる。今更尊い言葉だと思うのです。

二　自我は尊長すべきものか

つい先頃、恐らく冬至に入る際だつたろう。朝日新聞に山田無文師の一文が載つたことでした。題は「僧堂の冬至イブ」とあり。書き出しは、

「自我は尊重されなければならぬが、尊厳ではない。個性も尊重しなければならぬ。が、真理ではあるまい。徹底して自我と個性を否定しつくしたとき、そこに永遠なる普遍的人間が自覚される……。」といつた書き出しでした。

師は禅家の方ですが、やや現代思潮に遠慮があつてか、ずばりと断を下さず「自我は尊重されなければならぬが……」と云い、「個性も尊重しなければならぬが、真理ではあるまい」とやんわり云つていられる。

近代教育では「自我の確立」は根本的主要なものとされ「個性の伸長」ということに目標を置いていることです。これは凡その人間生活は自我をたより、自主的にやつて行く外はないからです。これは教育で云うように尊いものだとか、又一方仏教的に厭悪すべきだと云つても、人間自体が自我の塊りであり、それに基いて生活するよう出来でいて、今更よいわるいと云つても、そした代物が人間なんで、どうにもならない訳です。

それをどう処置するか、から問題が起るのです。それが仏教なんです。仏教では自我は迷いの本源をなすもので、それに執じ、愛憎から闘争をもたらすもので、個性は煩悩の種々相です。悟るとはその自我を解脱すること　即ち無我　大我の境を得ることなのです。

自我は人間につき物で　止むに止み難い存在で　極端に否定すると、死より他なくなります。こいつ、醜い、穢いと剝ぎ取つても　下から下から「らつきよう」の皮の如く現れる。人間全体が「らつきよう」で　芯の芯まで自我の皮で出来ているのです。

大乗仏教で　煩悩即菩提　生死即涅槃という。皮を一枚一枚はがすのでなく　全体を「らつきよう」とし、「らつきよう」なるが故に迎え取られるのです。

更にこれを炭団のたとえに移すと判る。炭団は芯まで黒く、触れるものすべてを汚す。全体が黒い分子から成つているのが炭団です。だが熱を加えると、すべてが火になり、寸分も除くべきものがなく、煩悩即菩提となるのです。

自我も個性も持つて生れたもので、自身では処理がつかない。いざとなると、各々の奥にひそめているアイクチの武器を抜く。教育といい道徳というのは、そのアイクチを幾重にも包んで、滅多に抜かないよう習慣付けるもので、アイクチを懐にしている点には変りはない訳です。

宗教、特に仏教は、その恐しいアイクチをひそめているおのれであることに目覚めさすもので、アイクチに手の触れるや、懺悔の驚きを発し、あやまりはてる。そうした内的なものです。即ち菩提心となり、自我が折れ、心を翻すのです。

三、亡父の齢となりて

硝子窓に写るは父かわが笑めばもの言ひたげに顔ほころばす
死にける父の齢とわがなりていよいよ父に似たり我が面
若きより憎み憎みて来にけるが少しかわゆくなれり我の面
大黒頭巾かぶるわが面亡き父にさながらなるよ洟出して
久々に泌々見れば高き鼻目もと口つき父に似てかなし
四十五年遇はざる父の面影と思ひて面を今宵より見む
物覚えせしより父は禿げゐしを己白髪となりて思ほゆ
がみがみ言ふ癖父に似れ父の如く老泣きもせで吾は生き来つ
唄ひませしは海晏寺浅くとも大津絵節帰る夜路に時に唄へり

堂の鈴（十五）

佐藤強三郎

雄三の母　（一）

手塚雄三の母は、色々の追憶にふけつた。

〈妹の長男も入学試験に落第した。雄三も遂に死んだ。ああ、母の愛も遂に及ばなかつた。雄三が死ぬ頃、〃お母さん、長々ありがとう。いかに慈母の力でも病気をなおすことは出来ない。医者の力でも、金の力でも、最後には無力です。そして残るものは、苦しむ心のみです。その心の問題を、平常から解決して置かなければ、間に合いませんよ、よく考えて下さい。どうか、お母さんを憐れむ、無碍のお慈悲に生きて下さい〃と云つてくれた。死後になお希望を失わず、感謝して死んだ。子に導かれるとは、この年になつて恥しい。私も深く考えなければならぬ〉

母はなお思い続けた。

〈雄三の死んで行く頃の様子は、誠に意外であつた。私は何の気なしに、只幼い時から聞き馴れていた通り、雄三に〃念仏しなさい。念仏すれば極楽へ往かれるのだ。何も心配しないで念仏しなさい〃と、死んで行く子を慰めたつもりでいたが、私の言つた位で子供が安心するわけがない。死んだら極楽へ行けるなんて、自分はまだ本当に信じて居ないのだ。本当に信じていない者が、口先ばかりで他人を本当に慰めようなんて、導くなんて、そんなことが出来るわけがない。咽喉の渇いている病人に、清水をやるかわりに、泥水を呑ませて平気で居るようなムゴイことをした。偽りの心で、真剣の心を慰めようなんて、こんな虚偽がどこにあろう。相手はさぞ腹が立つたであろう。人が命がけで救いの道を求めて居るのに、こちらは、自分でよく知りもしない、信じもしない事を気休めに言つているのだ。自分では知らないから、仕方が無いとは言いながら、こんなムゴイ事がどこにあろう。

それなのに、雄三は私を恨まず、こんな無力な、愚かな母に対しても、心から感謝して死んで行つた。本当に恥かしい。虚偽の心では、真実心をめざめしめることは出来ないのだ。自分は偽善者である。おそろしい〉

××××　　××××

母はさらに思う。

〈自分の実家は真宗であるから、私も子供の時分から、色々の説教をきき法事にも会つた。その上、雄三が病気してからは、何時でもお経を手にしていたから、自然に私も拝読する事が多くなつた。そして自分位の悪人ならば、これ位念仏して居れば大低お助け下さるであろうと思つて、気休めにしていたのである。ところがお経に、

慈悲に聖道、浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というはものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれどもおもうがごとくたすけとぐること極めてありがたし。また浄土の慈悲というは、念仏していそぎ仏になりて、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり。今生にいかにいとおし、不便（ふびん）とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏もうすのみぞすえとおりたる大慈悲心にてそうろうべきと、云々（歎異抄第四章）

とある。……ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとく、たすけとぐること、きわめてありがたし……とあるのはわかる。現に私は雄三を、たすけとぐることが出来なかつた。又妹の子も入学が出来なかつた。そうすれば、今生にいかに可愛いと思つても、思い通りには行かないのだ。仕方のないことである〉

××××　　××××

雄三の母は、一人静かに思つた。

〈人間も最後になれば、金も、物も、人間の力も間に合わぬ、そんな時、若し自分であれば、暗いわけもわからぬ未来の世界へ、シヤニ、ムニ、押し出されて行くだけであろう。希望もなく安心もせずに、病気のため仕方なく息を引きとるだけであろう。

それなのに、雄三は、心を救うものは唯無限のお慈悲のみであると、人を恨まず、静かに死んで行つた。あれは安心して行つたのであろう。何という不思議な姿がこの世にあるものか。私はその不思議な様子を、人として、母としてこの眼でハッキリ見せつけられたのである〉

母は或日信哉を訪ねて、静かに語り出した。

母「私は子供の時から永く念仏のお話を聞いて来ました。そしてお念仏の話は何度きいても同じで、大低わかつている。それは念仏する悪人をたすけてやる、というのでしよう。私はそう思つて、呑気に、人ともよろこんで語り合うことも出来たわけで御座います。自分も人に負けない位に法談も出来るとうぬぼれて居りました。

ところが、雄三も死んでしまい、あたりも静かになり、淋しくなつて来ますと。急に不安になりました。

そして、偽善という事を考えれば考えるほど、おそろしくなつて来ました。それでも念仏の事では、六十点以上の及第生であろう。そうすれば、今まで通りお念仏して居れば、極楽へ往けるだろう、とひそかに心を休めて居ました。こんなで、どういうものでしようか？」

信哉「貴女はそう思つて、それで満足出来ますか。安心して行かれますか。何の不安もなく死んで行かれましようか。よく考えて下さい。」

××××　　××××

信哉「信心には、六十点以上の及第点を採つている者は、心配なく卒業出来る。死ねば極楽へ行かれるというようなものではないのです……。信心には百点か、零点か。真か、偽かの二つしかない……。例えば、偽物の書画を見て、これは大低間違いないものと思うが、どうも変な所がある。そうすれば、それは上手に出来た偽物という事になり、全部偽物ということになつてしまう。自分が満足出来なければ、安心にはならぬ。すこしでも欠けていると面白くない、不安です。それじや最後には全部不安になつてしまう。良く出来た偽物は、見極めが困難ですが、偽物は偽物です。真偽半々の雑物など信心にはない。見る人が見れば良くわかるでしよう。

信心の話は、自分でもわかると思う。自分の心の内に安心が出来ているか、どうか。どんなにうまく口で他人に説明しても、得意になつていても。自分独りで寝てからよく考えて、安心していられるかどうか。他人は口先で誤間かせても、自分の心は誤間かせない。仏様はこちらで誤間かせたと思つていても、いつも真実を御存じです自分の不安は、だんだんつのるばかりです。

××××　　××××

或人が、七十歳位になるまで、立派な信者として、自他共に許されて来たが、或時、本当の信者から、一言、〃お前さんの信心は、自分で造つて、得意になつているだけで、そんな信心では往生は難しいぞ、気を付けなさい〃と云われ、それから不安になり、永年の安心も一遍に崩れてしまつた。いくら力んで見ても、昔の様に、俺は信心家だ、間違いなく死ねば極楽詣りだと、安気になれなくなつてしまつた。

『念仏すればたすかる』と教えられ、七十歳のこの年になるまでそう思つて来たが、今は念仏しても安心が出来ぬ。方々の法談に誘われて行けば、皆が上座に据えて、どうか何時ものようにお話を願います、といわれる。だが何も云えぬ。用事にかこずけて早く帰つてしまう。その後は法談に行くのがいやで困つて、もう何処へも出ないときめた。訪ねて来る人にも面会を断つている。困る

やら恥かしいやら、くやしいやらで、気が落着かぬ。残念でしようがない。

一代の間、仏法にだまされてしまつた。くやしい、にくらしい。恥かしくて外出も出来ない。思い切つて仏様の舌を抜いてやれ、と思つて、釘抜を握り、仏壇の仏像をにらんで、苦悶した人もあつた。

一言偽物と云われるなり、一切合切、信心が崩れて、仏様を嘘付きと憎むようになつてしまつたのである。

私はその人に会いました……」

××××　　××××

信哉「海の向う岸へ泳いで渡ろうとした時に、たとえ、もうすこしで手の届きそうな所まで泳いで行つたとしても彼岸に達しなければ、目的地へは上陸出来ず、溺死でしよう。そのように、泳ぎ通せず溺死しようとしている自分を見て気の毒に思い、どうしても救い上げてやらねばならぬと、船にのせて届けて下さるお方が、一人あれば、それで解決するでしよう……。

人生の広海を渡り、彼岸に到達せんと念願する者は、生きている間は勿論、死んださきでも　その信心一つで安心して行かねばならぬ。

貴女も自分の心の中をよく考えて見て下さい」

××××　　××××

母は又或日、一人で信哉を訪ねた。

母「私は偽善の者で御座います。雄三が病気になつて、もう助からぬと、医者に云われた頃から、雄三に〃お念仏を申しなさい。そうすれば、死ねば極楽へ行かれます〃と言いました。私は自分で念仏すれば必ず極楽へ行かれるという確信がないのに、そんなことを言うのは、本当に偽善であると思います。雄三に対してすみません。近頃毎日思い出しては悲しく思います」

信哉「それは子供を愛する心情から、そう云つたのでしようが、只口先で子供に〃念仏しなさい。死ねば極楽へ行かれる〃と云うのは、それこそ、

口には願力をたのむと云いながら、心には確信がないのだから、願力を疑つているのです。

そうだとすれば、それは、口と心と、違つているから、偽善ですね。嘘ですね。偽りですね」

母「私、考えれば考える程、私の偽善がおそろしくなつて来ます。今までは念仏申して居れば、それだけで気もまぎれ、何となく安心していた様でしたが、偽善が苦になり出してからは、仏壇に向つてお灯明を上げるのもおそろしいのです。

今まで雄三をだましていたのだ。従つて仏様をもだまして来たのだ。ホントに申訳がない、大罪人です。

前には、朝起きて、お参りするのが楽しみでした。夕べにはお灯明し、お香、お花をあげてお念仏を唱えるのが安楽でした。寝てからも力強く感じてありがたかつた。

ところが、近頃は一日の仕事を終えて、暗くなつて仏壇の前を通るのがおそろしくて仕様がない。ことに夜などは身にしみておそろしいのです。暗くなると〈お前は偽善者ではないが、悪るい奴だ〉と。仏様に言われている様で不安でたまらぬ。仏壇の前へ出るのがいやで、遠廻りして歩くようになりました。

ああ、夜が明けたらどんなによいが、と明るくなる朝を待ちますが、やつと、明るくなればなつたでまた苦しい。子をいつわり、仏をあざむき、只自分一人で、良い気になつて、ウカ〳〵して過して来たことが、恐ろしくて仕方がない。何十年と念仏していながら、子供の死ぬ前に、本当のお念仏の話もしてやることが出来ないような、愚かな偽善者であります。

それを思うと、今は本当に有難いお念仏が出ません。無理に念仏しても、有難くも何ともないし、滅入つて来るばかり、念仏するのが恥がしくて、口に出せなくなつてしまいました。

念仏が出なくなりました。偽の念仏を申しても、おそろしいばかりで、なんにもなりません。そうかといつて念仏しなければ、なおさら淋しいのです……」

哉「子供に対しても偽善の、不実の母であつた。仏に対しても、不実な虚偽なものであつた。それを自覚しても、今更誠実にもなれぬ、と苦しまれるのですね」

母「そうです。聞けばきくほど自分はひどい。苦しみはつのるばかり。地獄必定です。

家でいくら考えても、これで安心だ。これで十分であるとならぬので困つています」

信哉「貴女の偽善者であることを、かねてからよく知り、今更それを直すことの出来ないのを憐んで、どこまでも呆れ給わぬお方があるのです。それが仏様です。

その本願をさまたぐる程の悪なしと仰せられてあるのです。」

××××　　××××

雄三の母は色々な話をきいたが、聞けばきくほど、だんだんわからなくなつて、只おそろしくなつて来るばかり遂には挨拶もそこそこに帰つてしまつた。

つづく。

大安慰

花田正夫

大とは絶対をあらわす言葉で、唯一無二で、世間にならぶことのないものであり、安とは安穏にすること、慰とはなぐさめること、人々のこわがり恐れているのを、こわがることはないと慰めて落着かせることを大安慰といわれるのであります。親鸞聖人は、和讃の中で、左訓をつけられまして、

「だいあんいは、弥陀のみ名なり。いつさい衆生の、よろずのなげき、うれい、わるきことを、みな、うしのうて、やすくやすからしむ」

とお示しになりました。

大経の有名な歎仏偈の一節に、

「我誓う仏を得んに、あまねくこの願を行じて

一切の恐れ懼れるもののために、大安を作さん」

とあります。この偈文は、法蔵菩薩が、お師匠の世自在王仏の前にすすみ出て、その仏徳をたたえまつりながら、やがて御自身の誓願を述べられるところであります。菩薩の御目にうつる我々の姿は、〃三毒の煩悩の雲霧に覆われて智恵の眼はめしいて了い、無明の大夜にあつてはてしのない生死の大海をさまようて、疑心暗鬼を生ずる道理で、事毎におそれおののき、片時もやわらぐことなく、寸所もやすらぐところも無い〃有様であります。この我等のために本願をおこされて、大安を得させずばおくまいとの、大慈大悲の誓願があります。これあつてこそ阿弥陀仏を大安慰と讃仰申すのであります。

さて、私に愚考いたしますのに、大安とあるからには、中安、小安、も予想せられますはずであります。そこで、小安とは、一時的、部分的な、假りの安らぎでありましよう。病気してもお金持だからとか、苦労があつても立派な子があるからとか、或は貧乏はしていても身体も丈夫で若いから、というように、物に人に、自分自身に、何かたよりになるものを持つていて、それでしばらくは安んじて居る状態でありましよう。

次に中安とは、人として高遠な理想を堅持していて、それを力にしてあらゆる困難を克服して行く人々のことであ

りましよう。古くは孔夫子とかソクラテス、近くは印度のガンジイ翁の如き人々で、人類三千年の歴史上に綺羅星のようにひかり輝いていることは何人もよく知ることであります。何故中安と呼ぶかと云えば、こうした道は、非常にすぐれた、特殊な人々、極く小数の人々ばかりが能くすることが出来るので、万人の道ではないからであります。

最後に大安とは、仏心のまことに摂取られて、やすらぎやわらぐことの出来る道で、老小・善悪・男女・貴賤・賢愚をえらばれぬのであります。弥陀仏の光明に触れる者は、身も心も自然に柔和となり、たとい地獄におちていて、ひまなく若悩をうけている者も、その光にふれて苦しみから解放せられて、三途の黒闇もひらかれる、と釈尊がお説き下さつているのであります。これひとえに阿弥陀仏の大安慰の徳光を仰ぐ者に自然に与えられるめぐみであります。

清沢満之先生の『絶対他力の大道』の中に、

「我、他力の救済を念ずるときは、わが世に処するの道開け、我、他力の救済を忘るるときは、わが世に処するの道閉ず。

我、他力の救済を念ずるときは、我、物欲のために迷わさるることすくなく、我、他力の救済を忘るるときは、我、物欲のために迷わさるること多し。

我、他力の救済を念ずるときは、わが処するところに光明てらし、我、他力の救済を忘るるときは、わが処するところに黒闇おおう。

ああ、他力救済の念は、よく我をして迷到苦悶の婆婆を脱して、悟達安楽の浄土に入らしむるが如し。我は実にこの念によりて現に救済されつつあるを感ず。若し世に他力救済の教なかりせば、我はついに迷乱と悶絶とをまぬがれざりしなるべし。しかるに今や、濁浪滔々の暗黒世裏にありて、つとに清風掃々の光明海中にあそぶを得るもの、その大恩高徳、あに、区々たる感謝嘆美のおよぶところならんや」

と表白されているのも、内に外にあらゆるさわり多い中にあつて、大安慰のひかりを身にうけられての讃仰の声であります。

ここで清沢先生が「他力の救済を念ずる時」と云われ、また「他力の救済を忘るる時」とならべられて、そこに心の明暗、開閉、迷悟の招来される体験をそのまま述べていられますが、そのことを私共は自分自身の上に一人一人味

わいたいものであります。

しばらく私自身の上で二つばかり述べましよう。

◆

それは七十五歳の母を亡くした項であります。愛別離苦の悲しみに打ちひしがれて居ります私に、友人などから温かい慰安の言葉、……親というものは老いれば老いる程、別離が切ないものだ……という風なことを聞くと、思わず眼頭があつくなりますが、これに反して……お年に不足はなくて……というような声を聞くと、冷たく、無情な人という、いやな思いにならされるのでありました。こうしたことを度々繰り返して居りました時、きびしく次のことが省みさせられました。

人がよく言うてくれると嬉しく、人がよく言うてくれぬとうらむ、というように心かさわいでやまないのは、結局人様がらの慰安を求めているからである。然し省みて今日まで、人様の親の死を心から痛んだことが本当にあるであろうか、自分自身がひどい冷血漢でありながら、淋しいからと云つて人様に同情を求めていることの横着さ。求める資格の無い者がそれを棚上げして人に求め、それが思うようにならぬと不平不満でいる愚かさ！

そうしたことを省みさせられると共に、この愛別の悲哀を「恩愛はなはだたち難く、生死はなはだつきがたし」と仏はかねてよくしろしめされて、御自身にその苦海を越えられると共に、その大道を掲げて、一切の苦悩の我等を、光明の彼岸にまもり渡して下さるのであります。その仏心の御真実にひきもどされては、暗く冷たい心の底から、あたためられ、念仏慈光のもとにやすらぎました。

愛別のかなしみふかしふかけれど
わがみほとけのなみだきわなし

の腰折は、その時感佩したままであります。かように、念仏にかえらされ、そこに満たされては、いたましい母の死も、仏心こそ私の真実の安宅であることを、身を捨てて指示して下さつた如来のお使者とかがやくのでありました。

◆

また時に、周囲の人々の云うこと、為すことが、一つ一つ苦になり気にかかつて、どうにもならない時、フト我身を省みさせられると、仏も法も忘れ、生命とたのむ名利の心を本尊として、文字通り名利の奴隷となりきつているあさましさ、雀の宿からのかえり道、宝のつづらと思いこんで開いて見た舌切雀の婆さんの驚きと同様であります。

自分の熱望し、執着する名利をさまたげるものを、のろい、にくみ、きらい、さげすみ、それとあべこべに、自分の都合のよい人々に、迎合し、こび、へつろうみにくさ、

そこに、ことごとにためらい、ことごとにびくづく偽善の衣に二重三重とつつみこまれた身の弱さ！暗さ！

「あゝまたしても念仏を忘れきつて！」と仏のふところにひきもどされては、ながい間わが家を捨ててさ迷い続けた蕩児が、やぶれ服をまとい、飢え疲れた身を父母の家にはこびこまれて、風呂よ、着物よ、食物よ、布団よと、色々介抱をうけるように、仏の慰安を蒙つて、ホット我に立ちかえらされ、明るさと、よろこびと、やわらぎを恵まれるという経験を何度も繰り返すのであります。

何時も、仏心のふところにじつと安んじて居ることが出来ないで、親の家に引き入れられた下から、またしても外に出て風雨にさらされ、困窮しては親の膝下にひきもどされ、またしても迷い出るという始末で、全く性こりのない身であります。

「摂取して捨てず」との弥陀仏のお誓いがそれにつけましても渇仰せられるのであります。仏心のふところに静かに何時も落着ける私共でありましたら、「摂め取る」だけでよいのでありますが、業縁に催されていかなる振舞をするか、内に八万四千の業因をもつ身には見当もつかない者でありますから「捨てず」とお誓い下さるのであります。

「逃げる者をつかまえて離さぬ、」とのおこころと承りますが、聖人は

「摂取不捨の故に正定聚に住す」

と仰せになつていられます。浄土に正しく生れる身にさせて頂けるのも。猫の眼のように変り、水に画く絵のようにはかない私共を、常に、つかまえて捨てず、との摂取不捨の願力一つに支えられるからであります。

十方微塵世界の、　念仏の衆生をみそなわし、
摂取して捨てざれば、　阿弥陀と名づけたてまつる。

弥陀仏の弥陀仏と名告られる所以は、摂取不捨の一事にかかつているとまで聖人は和讃でたたえられるのであります。

已上は、私自身の「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して」行方にまどい、身動きならぬ身を、引きもどされ、ひきもどされて信の旅を続けて居ります有りのまゝの姿であります。

近角先生は御晩年に、

跡もどり跡もどりしてたどるらん
甲斐なきことにこころまどいて

という歌を何時も愛唱していられ、お亡くなりになりました昭和十六年の九月に、会館の裏の応接間に伺いました時短冊にこの歌をお書きになつて、壁にかかげていられま

した。文常様が戦死され、宗教法案は無理押しに通過し、御自身は御不自由な中風、そうした中にあつての御信境でありました。

更に遠く、聖徳太子が御家庭で何時も、

「世間は虚仮、唯仏のみ是れ真なり」

と繰り返して仰せられたと、橘姫によつて伝えられますが、太子が横暴を極める閥族と共に、文化は低く、外には隋唐の大国をひかえ、朝鮮は叛乱をくりかえすという時、女帝推古天皇を援けられて、国是を定め、国風を高め、外交をととのえて進まれるにあたり、折にふれ、時に臨んで仏心のまことに無限の安慰を蒙り〳〵四十九年のお歩みを続けられました。その太子が仏心におさめられ〳〵る合言葉がこの常の仰せであつたと拝するのであります。

まことに、清沢先生のお言葉通り、はてしない生死の大海において、仏陀の救済を忘れる時、周囲は文字通りの大闇黒となり、わが道は閉じ、恐怖におののくばかりでありますが、他力の救済を念じる時、私共の居るところ、何時でも何処でも、光明が輝き、禍は転じて、道は洋々とひらけ、恐れおそれる心は自然と雲散霧消するのであります。

全くこの無碍の光明がましまさねば、迷乱と悶絶の渦中に永劫浮ぶ瀬もなしに終ることであります。「生死の世界に仏ましませば、生死なし」の金言も、生きたお言葉として信味させて頂くことであります。

ただ最後に省みさせられますことは、この大暗黒裡にこの不可思議な徳光を蒙りますことは、私共にとつては全く大驚異でありますが、然し広大無辺な仏徳から申せば、私共が現在信味させて頂けるものは「一毛を百分して、大海の水を汲む」に等しいもので、これから無尽蔵の法味を、時々刻々、よきにつけあしきにつけて頂きながら浄土の旅を導かれて参ることであります。大般涅槃を超証させて頂いた時こそ、その全分を思う存分に味到させて頂けることであります。現在の法喜に有頂天になつて、鬼の百でも取つたかのように思いあがつたかのように思いあがり易い自分をよく気をつけなければなりません。それにつけても善導大師は「軽毛」と自身を表白されましたが、微風にも浮き上る身を省みられた金言が仰がれます。

あとがき

野も山も春光にかがやいて参りました。花祭りの歌、甘茶の接待をうけた幼い日の思出もよみがえり、心はずむことであります。

○

私事で恐縮ながら、三十年近く使い古しました懐中時計が、修理も叶いませぬので困つていました時、二十九年型の鉄道時計が正確だと聞いて、早速新調いたしました。それからは何処に行きますにも、正確な時間が知れ、ホツとして居ります。

時計を持ちながら何時も確かといえないこと、他の時計を見ては、何時も迷うのは全くやりきれないとこでありますが、それにつけましても、正確なものを持つことの大切さ、有難さを知らされました。

パスカルは「我に不動の一点を与えよ」と真剣に求めたと聞きますが、常に北を指す北斗星は、何千年の人類の歴史に、大海を航する船人にどんなに大きな指針となつたことでしようか。私共人生幾山河越えて、生死の苦海を渡る者に、寸分のくるいのない確かさで、何時でも、何処でもかわらずあらわれて下さる「ただ念仏」のまことさ！まことにたのもしい限りであります。

それと共に、聖人九十年、「真実の教を顕わす、真実の行を顕わす、真実の信、証を顕わす」と、その仏の真実さを御生涯をかけてお伝え続けて下さつたことの有難さを謝しまつることであります。

○

欲生釈で近角先生は「いそぎ浄土にまいりたき心なきものを憐みたもう大悲の至極一をお知らせ下さいました。水際だつたおさとし感佩申すことであります。

竹風翁の生涯への福島先生の御文は、私には非常に懐しく覚えます。それは登張竹風先生のドイツ語辞典は、我々時代の全国の学生が皆愛用したものであり、又ニイチエの実存哲学を我々学徒に親しく紹介して下さつた先生で、忘れ得ぬ人であります。

柳瀬先生のお原稿は短歌草原誌から転載させて頂きました。蓮如上人が歌作をせられて「転法輪の因、讃仏乗の縁となりぬべし」と申されましたが、真実が歌心に通うことを教えられます、

堂の鈴の佐藤先生の御法語は、生活に即してヒタヒタと教えられ、熱心にお読み下さる方々の声も聞かれ、先生の労を謝して居ります。

御案内

毎月第一、二、三日曜午後一時半、一道会館、真宗講座、市電新郊通り一丁目下車

毎月廿四日午前、午后、市内昭和区小桜町、教西寺、法話会。市電御器所通り下車。

定価一部　二十五円（送共）
半年　百五十円（送共）
一年　三百円（送共）

名古屋市南区駅上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駅上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番